

日本統計学会会報

NO.116 / 2003. 7.23

発行——日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924
編集責任一國友直人（理事長）／藤澤洋徳（庶務理事）
山口和範（広報理事）／宿久 洋（広報理事）
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—みずほ銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 卷頭隨筆：「情報・システム研究機構の 発足にむけて」 北川源四郎	1	7. 学術会議報告 吉村 功	13
2. チュートリアルセミナーと市民講演会 4		8. 学会費の自動払込のお知らせ 13	
3. 保育室設置準備・運営委員会からのお知らせ 6		9. 科学技術情報発信・流通総合システム (J-STAGE) の参加について 14	
4. シリーズ：統計学の現状と今後 統計学の貢献とそれに対する評価 藤井良宜	6	10. 評議員会議事録 14	
5. 海外研修記 8		11. 2002・2003年度理事会議事録 16	
5.1 オーストラリアCSIROに滞在して 中野純司	8	12. 公募情報 19	
5.2 ウィーン便り 新村秀一	10	13. 会合案内 20	
6. 日本学術会議第19期会員候補者推薦について 12		14. 修士論文・博士論文の紹介 22	
		15. 事務局から 23	

名簿改訂のお知らせ

名簿の改訂を行ないます。事務局では名簿に記載されている項目の他に、入会時に記入いただいた項目などのデータベースを保持していますが、今回新たに「研究・教育・業務のキーワード」という項目を設けることといたしました。

名前、変更があった項目、および、「研究・教育・業務のキーワード」を平成15年9月15日までに、同封の名簿改訂用記入用紙に記入し事務局にご返送いただくか、e-mailでjusho@jss.gr.jpまでご連絡下さい。記入方法などについては記入要領をご覧下さい。

理事会や事務局からの連絡をE-mailで行なう場合もありますのでE-mailアドレスをお持ちでまだお知らせいただいている方は、この機会に是非お知らせ下さい。名簿掲載の選択を否とすると名簿には掲載されません。

卷頭隨筆

1 情報・システム研究機構の発足にむけて

北川源四郎（統計数理研究所）

国立大学法人法は7月9日に国会を通過成立し、来年4月には全国の国立大学および大学共同利用機関がこの同じ法律の枠内で法人化されることになった。基本的に1大学1法人の形で法人化する国立大学と異なって、統計数理研究所などの

16の研究機関は4つの大学共同利用機関法人として再編されることになり、国立大学以上に大きな変化が予想されている。法人化の在り方が検討された当初は、我が国の学術の健全な発展のために学術政策への研究者の関与が必要との認識か

ら、大学共同利用機関が結集してひとつの研究機構を構成することが真剣に議論された。しかしながら、紆余曲折を経て最終的には、人間文化、自然科学、高エネルギー加速器および情報・システムという4つの研究機構に再編されることになった。

この機構化によって、統計数理研究所は国立情報学研究所、国立遺伝学研究所および国立極地研究所とともに情報・システム研究機構に設置される独立した大学共同利用機関という位置づけになる。科学技術・学術審議会学術分科会の報告書には『この機構は、生命、地球、環境、社会などに関わる複雑な問題を情報とシステムという立場から捉え、実験・観測による大量のデータの生成とデータベースの構築、情報の抽出とその活用法の開発などの課題に関して、分野の枠を越えて融合的に研究すると同時に、新分野の開拓を図る。』と説明されている。他の3つの研究機構が人間文化、物質、エネルギーという従来の縦型学問区分に近いものであるのに対して、この研究機構は情報とシステムという個々の対象に捉われない横断型の学問分野の実現を目指した意欲的な研究機構と期待されている。

一方で、この研究機構の構成に関しては、多くの方々から疑問を投げかけられた。現実に存在するすべての研究機関をいくつかの機構にまとめるために異なる性格の研究所を無理やり機構として括ったという印象を持たれたのかもしれない。しかしながら、この機構化において我々は現在の研究所をなるべく説明しやすいように再編することを優先するのではなく、将来の発展を視野に入れた編成を心がけたつもりである。例えば、遺伝学はまさに情報の問題と捉えることができる。そうであるならば、当初は違和感があっても情報・システムに加わることが新しい発展の糧となるであろう。実際、機構化にあたってはライフサイエンスに属する二つの研究所を意識的に物質の観点から研究する自然科学研究機構と情報の観点から研究する情報・システム研究機構に分散することにしたのである。また、極域の研究も南極という対

象そのものに関する研究というよりは、極地という特異な場を利用して地球システムの解明を目指したものと考えれば国立極地研究所が自然科学研究機構ではなく、情報・システム研究機構に加わったことに関しても納得が得られるのではないだろうか。実際、南極は地球システムに関する空間的・時間的データの宝庫なのである。いずれにせよ、私はこれらの研究所の参加によってこの機構の幅が広がったことは、統計数理の健全な発展にとって大変よかったと考えている。

国立大学法人法の法制化の過程では、この情報・システム研究機構が一番の難産であった。とくに特定の対象を持たない方法の学問を理解してもらうには多くの困難があった。しかし、法律に用いられる用語のひとつひとつが過去の定義との関連で調べられる法制局審査において我々の機構が難渋したことはまさに、当機構が新しい試みをしようとしていることの証であったと我々は自負している。また、当機構のいう「情報に関する科学」とは何かということも問題になった。「情報学」で規定されたものを超えるものがなければ、情報に関しては現在の研究所以外に新たな機構を作る意味が見出されないからである。これに関しては、『すべての学問分野を「情報」と「システム」という観点から捉えなおし、複雑で不確実性を伴うダイナミックなシステムを解明するための情報取得の方法、情報抽出、知識発見、知識伝達の方法などを体系化する。』として従来の情報学の法制上の説明よりは、広範なものとして定義することができた。これによって、統計的視点が強調され統計科学の寄与がより明確にできたのではないかと考えている。また、システム研究に関しては、『システムアプローチによる複雑・動的で不確実性を伴う現象の解明を行う』ものとの説明が受け入れられた。これも統計科学の研究対象そのものといつてもよいだろう。

こうしてみると、統計数理研究所は幸いにもこの研究機構の中心に位置することができたといえる。さらにこの機構の横断的な性格を考えると、統計数理はいま広大な可能性の海に直面する機会

を得たといえるであろう。情報社会化およびITの発展の巨大な潮流の中で、統計関連の研究者は情報科学・情報学の勢いに圧倒されそのアイデンティティの確立に苦慮してきたと思う。しかしながら、今回の情報・システム研究機構の形成過程をみれば、統計が再び学術の中心的な役割を果しうる位置にいると楽観的に捉えることもできる。問題は統計研究者がこの機会を活かして重要な問題に対する本質的な貢献ができるか、そしてその結果に基づき新しい学問分野を創出できるかであろう。

それでは、統計数理研究所はこれから活動において何を目指すべきだろうか？次に、この点に関して私見を述べてみたい。私は現時点で統計数理が果すべき主要な役割は2つあると考えている。ひとつはポストIT社会を見据えた役割である。IT化が実現した社会においては、大量のデータからの情報抽出および知識発見が重要な問題であり、ここで統計数理がますます必要とされることは間違いない。もうひとつは横断型の科学技術という最近の運動における基幹的な役割である。昨今、環境・生命・経済・社会などの複雑なシステムに関する問題の解決に細分化された学問の総合化・融合が必要であることが指摘されている。しかしながら、単なる学問分野の寄せ集めではこれらの問題の解決は困難である。ここでも、データ取得、モデル構築、情報抽出、知識発見などの「科学の文法」としての統計学の役割が重要であり、またそのための新たな発展が必要である。

このような認識にたつと、我々の今後の取り組みとしてはこれらの二つの役割を見定めた方法的・理論的発展を目指す基盤的研究、その成果の展開を可能とするプラットフォーム形成そして問題解決と問題発見の場としての戦略的研究からな

る三層の研究体制の構築が必要と考えられる。具体的には、戦略的研究としては（1）予測と知識発見の方法、（2）不確実性とリスクの管理のふたつの分野が特に重要と思われる。また、それを支える基盤的分野としては（3）統計的モデリング、（4）データ取得とデータ解析の方法、（5）計算・推論と基礎数理が考えられる。肝要なことはこれらの二層の中間に位置する統計プラットフォームの形成である。基盤的研究分野の成果が論文出版だけに留まるならば、広範な学術分野への貢献は期したい。したがって、基盤的研究と戦略的な研究の二層構成に加えて、統計数理の成果を学術全体の汎用技術として確立するためのプラットフォーム形成が必須なのである。統計数理研究所では、これを統計ソフトウェア開発という形だけではなく、モデリングや計算の技術、モデル、ノウハウ、解析事例などの知識総体としてのメタウェア（仮称）という形で形成することが適当ではないかと考えている。情報学との関連といえば、情報学の構成をハードウェアとソフトウェアの二元論ではなく、メタウェアを加えた三元論にしたいというのが我々の狙いでもある。

今回の法人化は更なる変革の单なる第一歩に過ぎないということしばしば語られている。現在までの活動の延長線上に研究所の安穏な未来があるとは到底考えられないでのある。60年の伝統を誇るこの研究所も、そろそろ新しい時代にむけて脱皮する以外に発展の道はないであろう。我々は今回の法人化・機構化を統計数理の新たな発展の契機と捉えたいと考えている。おそらく統計学会の諸氏の中にも、学会の将来に関しても同様に考えられている方が多数おられるのではないだろうか。

2 日本統計学会チュートリアルセミナーと市民講演のご案内

2003年度日本統計学会企画理事

岩崎 学 (成蹊大学工学部)

柴田里程 (慶應義塾大学理工学部)

倉田博史 (東京大学教養学部)

チュートリアルセミナーと市民講演会を2003年度連合大会（会場：名城大学天白キャンパス）において実施します（主催：応用統計学会、日本計量生物学会、日本統計学会。協賛：日本行動計量学会、日本計算機統計学会、日本分類学会）。奮ってご参加ください。チュートリアルセミナーおよび市民講演会の詳細は連合大会ホームページ
<http://www.soec.nagoya-u.ac.jp/htm/staff/nemoto/gakkai/>
に掲載されています。

1. チュートリアルセミナー

チュートリアルセミナーに参加を希望される方は、2003年7月14日～8月25日に連合大会のホームページ上の
<http://www.jss.gr.jp/meeting/2003/tutorial/>
にお申し込みください。電子メール、FAXもしくは郵送で申し込まれる方は、「氏名、所属、連絡先住所、電子メールアドレス、出席テーマ名、（会員、非会員、学生）の別」を担当委員（岩崎）まで上記期日内にご連絡ください。なお、受講料はセミナー当日会場にて徴収させていただきます。

日 時：2003年9月2日（火）13：30～16：30

テーマ：以下の2テーマを並行開催します。

（1）官庁統計の理論と実際

（2）実験研究および観察研究における偏りの調整

会 場：名城大学 天白キャンパス

（愛知県名古屋市天白区塩釜口1-501）

（1）共通講義棟202教室、（2）共通講義棟101
教室

受講料（含資料代）：セミナー当日受付にて直接お支払いください。上記主催学会もしくは協賛学会いずれかの会員2,000円、非会員4,000円、学生（会員・非会員を問わず）2,000円

備 考：保育室が利用できます。利用を希望される方は連合大会ホームページ

<http://www.soec.nagoya-u.ac.jp/htm/staff/nemoto/gakkai/>

をご覧下さい。

内 容：

（1）官庁統計の理論と実際

・オーガナイザー：美添泰人（青山学院大・経済）

・講師と演題：

美添泰人（青山学院大・経済）官庁統計の位置づけと課題

加納 悟（一橋大・経済研）官庁統計に関する理論的話題

川崎 茂・高見 朗・會田雅人（総務省）国勢調査及び家計調査の精度と利用上の留意点

田辺孝二（経済産業省）企業活動に関する統計の課題と新たな集計事例

・概要（詳細は連合大会ホームページをご覧下さい）：

官庁統計（Official Statistics）の理解は「官庁が作成する統計」という意味だけではなく「公的な存在である統計」という意味でも捉えるべきであろう。どのような統計であっても、自らがデータを収集し分析する場合には、データの発生メカニズムを正しく理解していることが前提であり、その知識を前提にして初めて適切な分析手法を利用することができる。大多数の経済・社会問題を分

析する場合に利用可能となる良質のデータは官庁統計が中心であり、費用の問題から、分析者が自らデータを収集することは例外的である。この場合には、分析者は統計データの発生メカニズムを正確に理解しなければならないことは言うまでもない。今回のチュートリアルでは、正確に官庁統計を読み解くための入門的解説を試みると同時に、統計学の理論的な問題に興味を持っていうる聴衆に対しては、官庁統計の分析は理論家にとつても面白い分野を持っていることを紹介したい。

(2) 実験研究および観察研究における偏りの調整

- ・オーガナイザー：岩崎 学（成蹊大・工）・渡邊裕之（万有製薬）

・講師と演題：

岩崎 学（成蹊大・工）共分散分析と処置前後データの解析

山岡和枝（保健医療科学院）ロジスティック回帰分析を用いたデータの解析

松山 裕（東大・医）Propensity scoreを用いた交絡調整

・概要（詳細は連合大会ホームページをご覧下さい）：

調査研究はもとより実験研究においても、背景因子（共変量）に偏りが見られることが多くあります。このときは、共変量調整（covariate adjustment）もしくは共分散調整（covariance adjustment）とよばれる手法が使われます。これらは臨床試験や疫学調査をはじめとする多くの研究分野で必須の手法ですが、これまでまとまった議論が必ずしも十分でなかったことから今回取り上げました。共分散分析や処置前後データの解析におけるベースライン値による調整をはじめ、ロジスティック回帰についてコンピュータの出力を交え議論します。また、共変量が数多くある場合の傾向スコア（propensity score）による調整法もその初步から最先端の結果まで紹介します。

2. 市民講演会

市民講演会には会員、非会員を問わざどなたで

も参加いただけます。事前申し込みは不要ですので、お誘い合わせの上会場に直接お越しください。

日 時：2003年9月2日（火）17:00-19:00

会 場：名城大学 天白キャンパス（愛知県名古

屋市天白区塩釜口1-501）共通講義棟101
教室

テーマ：教育と統計

受講料：無料

オーガナイザー：岩崎 学（成蹊大・工）

講師と演題：

吉村 功（東京理大・工）データを見る目を養う統計教育

馬場国博（慶應義塾湘南藤沢中高等部）データサイエンス教育12年間の成果

林 篤裕（大学入試センター）入試データの活用方法～データの現場から～

・概要（詳細は連合大会ホームページをご覧下さい）：

パソコンおよびネットワークの進歩により、統計的データ解析の適用分野はますます広がりを見せている。それにつれ統計教育も、大学における講義だけでなく高校段階での取り組みなど量的質的な変容を迫られている。数学の一分野としての位置づけでなく、統計学の面白さや重要性を実際のデータを用いパソコン操作など実際に手を動かして体験する必要があるしそれが可能な環境も整いつつある。

今回の市民講演会では、バラエティに富む講師陣によりそれぞれの分野における統計教育関連の話題を紹介すると共に今後の統計教育を考えるまでの端緒としたい。

照会・連絡先：成蹊大学工学部 岩崎 学

〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

TEL: 0422-37-3764 (直通), FAX: 0422-37-3871

(工学部事務室),

電子メール：iwasaki@is.seikei.ac.jp

3 保育室設置準備・運営委員会からのお知らせ

保育室設置準備・運営委員会

2003年統計関連連合大会・日本行動計量学会第31回大会では大会会場内に保育室を共同設置いたします。現時点では以下のことが決まっています。

[場所] 学会会場内（名城大学天白キャンパス内）の一室。

[開室日時] 利用可能日時は、チュートリアルおよびセッションの開始10分前から終了直後まで。チュートリアルに関しては、事前に申し込みがあった場合にのみ開室します。

[利用者、保育対象者、および、保育者の資格・人数] 利用できるのは統計関連学会連合大会、日本行動計量学会第31回大会に参加し、かつ学会場に必ずおられる方。保育対象者は0歳児より小学生までです。保育者は（株）ポピングズコーポレーションから派遣されたベビーシッターです。保育者の数は全国ベビーシッター協会の安全基準（保育者一人に対し0, 1歳児：2名, 2, 3歳児：3名, 4歳以上：5名）に従い、事前にお申し込みの人数と月齢により決めます。ただし、開室時間中は、常時2名（保育対象者が2名以下の場合

は保育室設置委員会の委員を1名含む場合もある）は必ずいるようにします。事故の際のシッター・子供双方に対する賠償責任保険はシッター会社が加入のものが適用されます。

[利用料金] 利用料金はまだ決まっていませんが、未就学児：1時間600円～850円、小学生：1時間400円～500円、の範囲を考えています。兄弟割引、保護者が学生・非常勤職の場合の割引（半額）や長時間預ける場合の割引も検討中です。保育室を設置するにあたり日本統計協会から助成金をいただいています。

[その他] 利用にあたっては、利用申込書・同意書、保護者連絡表、保険証の写しなどを提出していただく予定です。どのようなものを提出していただくかも含め、保育室利用規定、運営規定は保育室設置準備・運営委員会で検討し、事前にお知らせすることにいたします。ご利用の際は必ず事前にお申し込み下さい。キャンセルや利用時間の変更をされる場合も必ずご連絡下さい。（e-mail宛先：mminami@ism.ac.jp）

4 シリーズ：統計学の現状と今後： 統計学の貢献とそれに対する評価

藤井良宜（宮崎大学教育文化学部）

昨年、日本から初めて2人の研究者が同時にノーベル賞を受賞した。特に、そのうちの一人である田中耕一氏が企業に勤務していたことと彼のキャラクターの面白さから、マスコミを中心に例年なく大騒ぎが繰り広げられた。このように、日本人の仕事が世界の中で大きな評価を受けることは喜ばしいことではあるが、日本の場合ノーベル

賞をあまりにも重要視する傾向が強く、一時は政府がノーベル賞受賞者の数を目標にしてしまうほどであり、逆に心配な点も多い。数学に関してはノーベル賞の対象ではないことはよく知られているように、ノーベル賞はいろいろある研究領域のすべてをカバーしているわけではない。そういう意味で、ノーベル賞だけでなく、もっと別な観点

からの評価も必要である。

このように感じているのは、日本人ばかりではないようである。昨年7月、ドイツのフライブルクで行われた国際計量生物会議に出席した。その冒頭に「Are statistical contributions to medicine undervalued?」と題したN. Breslow会長の基調講演が行われた。この講演の中で、2000年にノーベル経済学賞を受賞したJ.J. Heckman氏とD.L. McFadden氏の業績が紹介され、医学研究においてもケースコントロールデザインに関連して、統計学はこれに匹敵する大きな貢献を行っているが、その評価が低いのではないか、という考えが紹介された。このころ、ちょうど統計関連連合大会の準備のため、ケースコントロールデザインやロジスティック回帰分析に関連した論文に目を通していた時期であり、たいへん興味深くこの講演を聴いた。ケースコントロールデザインは、医学研究でよく用いられる研究デザインの1つで、患者集団と非患者の集団を比較することによって、その疾病の原因を探る方法である。このデザインは、最初に疾病に罹るか、罹らないかという結果からスタートするため、逆向きの論理が必要であり、当初はいろいろな批判にさらされていた。その際たるもののは、ケースコントロール研究のような偏ったサンプリング法で、本当に因果関係、あるいは関連性が推定できるのか、という批判である。この批判に対して、さまざまな理論的研究が進められ、現在ではケースコントロールデザインが観察研究の一つの手法としての地位を確立するに至っている。それらの研究の中で主だったものを挙げてみよう：

- 1) オッズ比という関連性の指標が提案され、この指標が前向き研究であるコホート研究の関連性の指標でもあり、ケースコントロールデータからもその推定が可能であること
- 2) オッズ比を複数の要因を含む研究に一般化したロジスティック回帰モデルのパラメータも推定可能であること
- 3) 推定方法として、最尤法あるいは擬似尤度法が適用可能であること

4) 層別による解析が関連性を示す上で有効であること

5) マッチングを行う場合の推定法として、条件付最尤法が有効であること

このような研究の流れを見ていくことによって、この分野における統計学の貢献が大きいことが再認識させられる。もちろん、現在においても、コントロールのサンプリング方法として、2段階サンプリング法やカウンターマッチング法のようなより効率的なサンプリング方法の研究が進められている。

それでは、なぜ統計学の貢献に対する評価が低いのであろうか。その原因のひとつは、統計学がある特定の対象を研究するのではなく、その方法論の研究である点であろう。たとえば、先に述べたノーベル賞を受賞した2人についても、統計デザインそのものよりも現象を明らかにするという目的を持って、そのためのサンプリングのデザインの工夫を行っている。このように、ある特定の対象を持つ研究の場合、研究成果がわかりやすく、その重要性の解釈も比較的容易になる。一方、方法論だけを議論する場合には、たとえ非常に優れた方法論であっても、それがうまく機能するような例がなければ意味がないであろうし、方法論だけではその重要性を認識してもらうのは非常に難しいであろう。その点においては、統計学は裏方であり、決して主役ではないのかもしれない。

しかし、現状は大きく変化しようとしているようを感じる。コンピュータの発達とインターネットの普及が、統計の世界に大きな2つの変化をもたらした。その1つは、統計ソフトウェアの充実である。少し前までは統計を利用しようとすると、「計算」という大きな壁が立ちはだかっていた。電卓で計算するにはデータ数が多く、複雑な計算をするにはプログラミングが必要であった。しかし、統計ソフトウェアの充実によって、現在ではデータを入力すればコマンドを選択するだけで、必要な統計量やp値、信頼区間まで計算してくれる。その上、統計専用のソフトウェアを購入しなくても、Excelのような表計算ソフトでもグラフ

を作成したり、t検定や回帰分析などの解析は行うことができるようになってきた。このようなコンピュータ環境の変化は、統計ユーザの裾野を大きく広げるのに大いに役立っている。そうすると、統計ユーザにとっては、ソフトウェアさえあれば、どんな複雑な解析でも可能となり、「計算」よりも統計解析の意味やその解釈の方が問題になってきている。最近、統計パッケージの使い方や、解析結果の解釈について、分かりやすく説明している本が増えているのもその現われであろう。また、共分散構造分析が注目を集めているのも、パス図を使うことによって解析結果がユーザにとって分かりやすく表示されている点が、大きな理由の1つとなっている。それと同時に、統計ユーザの統計学に対する要望も変化してきている。これまでオーソドックスな統計量を計算して検定できる、ということが1つの目標であったが、それは容易にできるようになってきた。そこでもっと詳しい分析がしたい、もっと詳しい仮説の検証ができるのか、という要望も増えてきている。これは統計学研究者にとっては大きなチャンスとも言える。そのような要望のなかに、面白い問題が含まれているのではないだろうか。たとえば、回帰分析での変化点に関する検定や有限混合分布における混合する分布の数の検定では、尤度比検定統計量に対して通常の漸近論が適用できない。そのため、統計量の分布の計算をどうするのか、という問題が浮かび上がってきていている。このような統計ユーザの要望に取り組み、答を見出していくことが統

計学の発展に不可欠である。

もうひとつの変化は、よく言われている話ではあるが、大量のデータの解析に関する問題である。インターネットの普及や入力方法の改良（バーコードの利用など）によって、時々刻々とデータが蓄積され、膨大な数のデータとなっていく。しかし、このようなデータに対しては、これまでの統計的推測はうまく対応できない。無理やり適用すれば、データ数が多いためにほとんどの検定が棄却される。データの収集方法をみても、ランダムサンプリングやランダムな割付が行われない場がほとんどで、検定の前提条件を十分に満足してはおらず、バイアスなどが気になるであろう。このように仮説の検証という点においては、いろいろな問題が生じているが、解析の目的は探索的に仮説を見出すことにあり、それに関してはいろいろな対応が考えられ、これから発展していくであろう。

このように、統計学は今、大きな分岐点に差し掛かっている。そこには、大きな宝の山が隠されているかもしれないし、うまく対応できなければ、どこか他の分野に吸収されていく運命かもしれない。これに対して、今私たちにできることは、目の前に転がっている問題に取り組んでいくことであろう。私自身、現在宝の山らしきものの上で、右往左往している状況であるが、そこに埋もれている宝物を探し出し、いつか統計学の発展へと貢献したいものである。

5 海外研修記

5.1 オーストラリアCSIROに滞在して 中野純司（統計数理研究所）

2002年5月13日から2003年3月12日までの間、オーストラリアのCSIROで研究する機会を与えられました。CSIROはCommonwealth Scientific and Industrial Research Organisationの略で、（オーストラリア）連邦科学産業研究機構と訳されるようです。情報、バイオテクノロジー、エネルギー、鉱

工業、農林水産業など多くの分野にわたる研究を行い、オーストラリア全土にそのオフィスをもち、構成員が6500人にもおよぶ巨大な（国営の）研究組織です。わたしが滞在したのは、CSIROの部門のひとつであるMathematical and Information Sciences（CMISと言われています）の中心オフィスです。ここはシドニーからバスで40分くらいの北西郊外にあるマクオーリー大学のキャンパスの

一つのビルにあり、約100人ほどのスタッフを有しています。CMISはこのほかに、キャンベラ、ブリスベン、アデレードなどにもオフィスをもっています。

CMISを滞在先として選んだ理由としては、現在こここの部長をしているDr. Murray Cameronと長年にわたってつきあいがあること、CMISがデータマイニングや計算機統計学の実用に力をいれていること、がありました。さらに、いくつかの外国の大学には（短期間にすぎませんが）滞在した経験があるのですが、CSIROのような研究所には滞在したことなく、その研究体制や組織、および変革の過程に興味があつたこともあります。

CSIROにおける統計学研究の歴史は古く、最初の統計研究者はR.A. Fisherに師事した女性研究者に遡ります。そして、Cornish-Fisher展開で知られるAlf Cornishが長く統計部長を勤め、その後、Joe Gani, Terry Speed, Peter Diggleが部長となり、大きな組織となりました。ところが、1989年から統計部は独立部門としては縮小されることになり、1996年には情報部門などと統合され、CMISになりました。現在、CMISに所属する統計学者は全体で40人くらいいるようで、シドニーにはそのうち10人ほどがいます。

CSIROの各部門で多くのデータが取られていることもあります。ここでの統計研究はデータとの結び付きが非常に強い、実際的なものようです。例えば、空間統計学に関するワークショップがブリスベンで開かれましたが、その中では自然環境や漁業資源に関する具体的なデータの測定法が、統計解析の方法とともに議論されていました。このワークショップには、オーストラリア各地のCMISから20人ほどの参加者が集まり、近くのホテルなどに宿泊し3日間行われました。そして、アメリカで活発に空間統計を研究しているゲストスピーカーを招き、彼の最近の研究を集中的に話してもらう時間もありました。このような集中的で時間的余裕をもった小人数参加のワークショップがCMISではよく行われていましたが、研究を推進するために非常に有益だと思いました。なお、

ブリスベンのCMISオフィスの庭には野生のコアラが住んでいて、いかにもオーストラリアという感じがしました。

事前に情報はもらっていたのですが、CMISに到着してすぐに、ここが大きな変革の最中であることを感じました。Murray CameronはCSIROの新しい基本方針を決定するために、アメリカのいくつかの有名な研究所を視察にいっていましたし、わたしを受け入れてくれた統計グループは、ファイナンスのようなビジネス分野から、疫学や医療統計の分野にテーマを変更することを考えていました。実際、この変更はすぐに実行され、わたしも週に一度の疫学統計の勉強会に参加しました。また、アメリカから疫学統計の専門家を招いてのワークショップも行われました。

CSIROではプロジェクト制が取られており、数人がひとつのプロジェクトを構成しています。ひとりが複数のプロジェクトに参加することができますが、どの程度の時間を各プロジェクトに使うかを申告しなければなりません。プロジェクトが終了した場合、別のプロジェクトに移ることになります。キャンベラでのプロジェクトの終了後、ここでのプロジェクトのために移って来た人もいましたし、統計グループが新しいプロジェクトを開始したときに、それに参加せずにCSIROを去った人もいます。日本でもプロジェクト制が始まろうとしていますが、これには利点も欠点もあることが実感できました。利点のひとつは目標の明確化とグループによる研究の効率性でしょう。欠点の中に、研究者の制御できない外的条件の影響を受けやすいことがあります。例えば計算機関係のテーマでは、プロジェクト開始時の数年前と評価時点とでは状況が変わってしまっているために、当時の花形プロジェクトが打ち切りになることもあったようです。評価に関しては、CSIROでも試行錯誤を繰り返しているようでした。

ところで、CMISでは統計解析ソフトウェアS-PLUSの販売と教育を行っています。これは、以前のSIROMATH社の業務を引き継いだものです。このSIROMATHという会社は、CSIROの統計グ

ループのメンバーがコンサルティングやソフトウェア販売のために作った会社で、全面的にCSIROの支援を受けていました。結局、SIROMATHは長続きできず、そのメンバーの何人かはまたCMISに戻っています。それに関する話を聞いてみると、(統計)研究機関が経済的に自立することは、非常に難しいということがよくわかりました。

CMISがあるマクオーリー大学には、経済・ファイナンス学部の中に統計学科があり、セミナーの連絡などはお互いに行っていました。わたしもCMISと大学の両方で別々のセミナーをやらせてもらいました。ただ、わたしがこのキャンパスでもっとも印象深かったことは、中国人学生が非常に多い、ということです。生協に昼食を食べに行くと、過半数が中国人学生という感じでした。これらの中中国人学生が故国に帰って活躍するようになれば、中国の未来は明るいのではないかと思いました。もっとも、マクオーリー大学の中国人助教授は、今来ている中国人学生の多くは一人っ子政策のためにあまやかされているので頼りにならない、と言っていましたが。

CMISのスタッフにもアジア系、特に中国系の人は多く、多文化主義がだいぶ進んでいることがわかりました。もちろん、他の英語圏からの出身者も多く、本当に国際化が進んでいました。CMIS内では、ときどきドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、ベトナム語、ネパール語などとびかっていました。日本人はわたし一人でしたが、日本での長い留学経験のある人がいて、たまに日本語で話すがありました。また、サッカーのワールドカップはこちらでも(CMIS内でも)盛り上がりましたが、それはオーストラリアが出場できなかったにもかかわらず、イギリス、ドイツ、韓国などから来た移民の人達が熱狂的に応援したためもあります。

そして、インターネットやコンピュータの進歩は数年前とは海外滞在の状況を一変させていました。インターネットを利用すれば、シドニーにいても日本のニュースは実時間ではいってきます。

国際電話の通話料金も国内電話並みに安いものが利用できました。さらに、インターネット会議システムを使うことにより、日本との定期的な会議さえ無料で行えました(これは日本との時差が1,2時間ということも大きな理由です)。また、Windows xpを利用すれば、日本語も含めた世界の主要言語の入力や印刷が何の苦労もなく可能でした。世界は本当に狭くなつたと感じました。このことは十分理解はしているつもりでしたが、実際に体験することとは別でした。

いろいろな場面で、地球はもはや狭く、学問も生活も国際的に行わなければどうしようもない時代である、ということを痛感させられた10ヵ月間でした。

5.2 ウィーン滞在記

新村秀一 (成蹊大学経済学部)

この4月1日より“花の都”ならぬ“音楽の都”ウィーンにて、在外研究を始めました。中学・高等学校の頃は、ガウスに憧れドイツのゲッティンゲン大学に、大学では数学家の学生はフランス語を第2外国語に選ぶ者が多くパリ大学に、そしてつい最近迄はこれ迄の研究に一番かかわりの深いシカゴ大学のビジネススクールのライナス教授に在外研究の受入れをたのみ了解を得てきました。

しかし、ここ数年の情況を考えますと、アメリカに行くのは気が進みませんでした。また、毎年2回ほど大学の研究費と自己資金で、主としてヨーロッパで開催される国際会議で発表することを自分に課してきました。昨年エジンバラ大学で開催された国際OR会議に出席し発表しました。その際、最近の私の研究(整数計画法を用いた判別関数)と似た内容(SVM)を研究している中山甲南大教授が、これからウィーンのIIASA(International Institute for Applied Systems Analysis, www.iiasa.ac.jp)の研究会に行くというのです。

IIASAは、フォード元大統領の「環境、エネルギー、食糧などの問題を世界中の研究者が協力して解決しよう」という提案のもとで、ウィーンの南、バスで30分のLaxenburgにある元ハップスブル

ク家の夏の宮殿Sclossplazに設立された国際的な研究機関です。日本は、RITE ((財) 地球環境産業技術研究機構) が毎年分担金を払っています。私の研究テーマの一つである数理計画法をベースにしたアプリケーションなどが有名で、自分の研究テーマにもぴったりなので、Risk, Modelling and Society (RMS) グループに滞在を申し入れ昨年12月に招待状をもらいました。

しかし人間は欲深いもので、決めてしまってから、「本当は、若いころの夢はゲッチンゲン大学やパリ大学、そして最近ではシカゴ大学に行くのが、自分の夢ではなかったのか?」それがよりによって研究機関を選ぶとは!」と自問自答を繰り返しました。

大学に奉職してからは、これ迄の研究のスタートラインの遅さを取り戻すため、毎年夏に2回位は国際会議での発表を自分に課してきました。しかし、1年間の在外研究になると、VISA、無犯罪証明書、所得証明書、保険などの手続きが煩雑なのです。この3月迄教務委員長で目を白黒させていたので、とても準備が間に合わないのではと諦めていました。しかし2月末に、IAEAと同じくブルーVISAの取得などはIIASAのスタッフがやるので、普通の観光客として入国すればよいと分かり、急に肩の荷がありました。成蹊大学の法学部からは、若手のドイツ語の教員がウィーン大学に在外研究にいくことになっていましたが、3月末まで大使館やドイツ人医師による健康診断などで走り回っているのに比べ、天国と地獄の違いです。

アパートは、オーベルジュホテルのAltwienerhof (www.altwienerhof.at) に一週間の予約を入れ、一年間滞在するとどれ位安くなるかとメールを入れました。すると、たまたまオーストリアで第3位にランкиングされていたレストランを、オーナーシェフの健康上の都合で閉めることになり、その関係でソムリエが入っていた部屋(80平米ぐらい)を500ユーロで貸してもらうことになりました。これで、洗濯、朝食の準備などのわざわしさから開放され、自分の時間を十分にとることができ

ます。

4月2日にIIASAに行って、事務的な手続きと、PC環境の整備は情報部門のスタッフがやってくれました。私は日本語環境が使えない仕事がはかどらない、と考えていたので、日本からプリンタやインクを送って結局はアパートで仕事をすることになると思っていました。そのプリンタは税関に引っかかり5月末にやっと入手しましたが、私の不安は見事に裏切られ、4月3日から自分の研究室で仕事が開始できるようになりました。ここが、大学にいくのと研究機関の大きな違いでしょうね。大学は、世界中どこも、お客様を迎える体制が十分でないと思います。また、CANONのプリンタは、吉祥寺の有名店で買った値段よりウィーン市内で安く手に入ります。

IIASAで特に感心したのは、電子図書館のほか、ミノルタのコピー機のボタンを切り換えてメールアドレスを入れた後、原稿がスキャンされ画像イメージになります。そしてPDFファイルが添付され送信されることです。最初はどうとも思わなかったのですが、1時間程して急にひらめきました。そうだ、手書きの原稿を東京の私設秘書に送って入力し、送り返してもらおう。私は数年前から仕事のし過ぎ(?)で、目を悪くして、手書き原稿を人に入力してもらっていました。ウィーンでは音楽留学生の中で、ワープロに堪能な学生をどう確保しようかと出発前に、思い悩んでいました。「これで日本にいる時よりも知的生産性が上る!」と。私は馬鹿正直ですから、経済学部の同僚へ報告を兼ね、「日本より何倍も知的生産性が高く、1ヶ月で本1冊仕上がりそう」とメールしましたが、誰からもウィーンからのたわごととばかり返事がきません。実際には朝8時30分から17時30分迄と、研究所の中で一番熱心に働いて、ようやく6月下旬に何とか原稿を書き上げました。その間、1000枚以上の手書き原稿を東京とやり取りしたように思います。

さて、“音楽の都” ウィーンは、何はさておいてもオペラです。4月にJTBに行くと、「丁度ワレキューレというオペラの定番、しかもウィーン

フィルの演奏のプラチナチケット（皇帝家族が坐ったミッテラウンジの最前列どまん中の席）が210ユーロありますよ」と、音楽お宅風の女性にいわれ購入し、4月27日（日）にオペラ座に乗り込みました。本当に土間の下々をみおろすミッテラウンジの最前列の真中です。3時間に及ぶ長丁場も全く意味も分らない（ドイツ語と筋そのもの）けれどその日は満足して帰りました。

数年前、学生の1人が私に「先生、僕は数学は決して嫌いではないのですが、数式を見ると頭がまっ白になるんです」という面白いことを言いました。私はウィーンに来てようやくこの学生の状態が分りました。

何の前知識もなく、オペラを聴いた私には、全くストーリーが理解できなくて、ミッテラウンジに坐った（大学に在籍した）という事実だけが残っているのです。そこで、遅きに逸しましたが、オペラのDVD（ドンジョバンニ）を購入し、“予習”することにしました。最初はそのまま見ましたが、よく分りません。次に英語の字幕付きでみると、最初のシーンはドンジョバンニが女性の部

屋に忍び込み、その後で父親を殺害するシーンです。確信が持てなかったのは、もう1人の男性が下僕であるということです。字幕によって最初からキャストの役割り、しかも主要な3人の女性の位置づけという大枠が分り、重要な点を抑えられたという点です。最近の学生の中には、見栄としての単位修得に汲々としている者が多く見受けられます。予習もしないで事前の知識がなければ、私が3時間訳も分らずワレキューレをみたのと同じであることを、私自身体験しました。私はその後、アイーダ、シモン・ボッカネグラ、トスカ、カルメンのDVDで予習し、スロバキアの首都布拉チスラバのオペラを土曜日に観に行っています。夕食とシャンパン、そして最前列でオペラの鑑賞を含めて58ユーロと、何とウィーンの2割程度です。

夏前にもう一冊執筆した後、秋から研究をスタートしますが、これ迄つやのある人生を送ってこなかつた私にとって、布拉チスラバのオペラは良い刺激を与えてくれそうです。

6 日本学術会議第19期会員候補者推薦について

藤越康祝（日本統計学会会長）
国友直人（日本統計学会理事長）

会報No.114で既にお知らせ致しましたとおり、日本学術会議会員推薦管理委員会からの要請に従い、統計学会の会員による推薦候補者の選挙を延期いたしました。

その後、学術会議事務局より会員の推薦手続きを再開するとの連絡を受けましたが、推薦締め切りの期日が差し迫っていたため、会長と理事長が協議した結果、評議員会での意向などに基づき、経済統計学は松田芳郎会員、統計学は柳川堯会員、

情報学は北川源四郎会員、をそれぞれ学術会議に会員候補者として推薦いたしました。この間の事情に鑑み、皆様方にはこの処置について御理解をいただけますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

なお、当学会から推薦した3名のうち、第3部経済統計学 松田芳郎氏、第4部 統計学 柳川堯氏が会員として推薦すべき者として決定したという報告が、日本学術会議会員推薦管理会委員長より届きました。

7 学術会議報告

統計学研究連絡委員会 委員長
吉村 功（東京理科大学）

1. 学術会議総会

第18期最後の総会が2003年6月2－5日に開かれました。7月下旬には、第19期が発足します。統計学研究連絡委員会の新しい世話担当会員は、柳川堯（九州大学）教授の予定です。第19期は任期（3年）の途中で中断され新しい体制になる予定で、すでに制度変更のための法律整備が進んでいます。

学術会議は、学者の国会といわれるよう、学・協会等、学問の研究者組織とされているところから推薦された人を、総理大臣が（特別公務員である）学術会議会員に任命します。学術研究者は、その職務を、研究者の見識を政府の政策に反映させ、政策に指針を与えたり、研究者間の学術的交流を進めたり、外国の類似組織への対応窓口を用意するものと考えてきたと思います。

「総合科学技術会議」は（政府決定として）学術会議の果たすべき機能を、政策提言機能、科学に関する連絡調整、社会とのコミュニケーション機能、であるとしています。改革は、現在の制度がこの機能の展開に適当でないという政府の判断、学術会議運営審議会の判断等によっているようです。細部の決定はこれから1年半の間になさ

れるでしょうけど、任期6年（3年ごとの半数改選）、70歳定年、co-optation制度（教授会が補充する教授を選考するようなやり方）、研連の廃止、等が予想されています。

現会長は、外国に対し「日本の科学者コミュニティ」として機能させたいということを再三にわたって発言していますので、一般学者からの代表推薦というより、権威ある学術会議が学問的業績を認定し、その眼鏡にかなった人を集団に構成員として選びたい、ということのようです。改革は「成果を挙げた偉い人（scholars of distinctive merit）の集まり」としての学者集団という色彩が強くなりそうです。

2. 統計学研究連絡委員会

今期、統計学研究連絡委員会は、科研費審査員候補の推薦といったルーティンワークの他に、統計学関連学会の協調という目的を追求してきましたが、結果として成果を上げるに至りませんでした。これはひとえに小生の能力の故であり、小生が2期でやめることを決意したのもそのためです。退任に当たり、関連学会の期待に応えられなかったことをお詫びいたします。

8 学会費の自動払込のお知らせ

日本統計学会では学会費の自動払込が可能です。学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。どうぞ便利な自動払込をご利用ください。

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9

大和ビル内

財団法人統計情報研究開発センター

日本統計学会係

TEL: 03-5467-0481, FAX: 03-5467-0482,

E-mail: jstatsoc@sinfonica.or.jp

9 科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）の参加について

科学技術振興のための基盤整備と先端的・独創的な研究開発の推進並びに科学技術理解増進事業の推進を目的として1996年10月1日に設立された科学技術振興事業団（JST）（<http://www.jst.go.jp/>）では、事業の一つとして、日本国内の科学技術情報関係の学会誌、論文誌の発行を電子化し、電子ジャーナル発行を支援する科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）（<http://www.jstage.jst.go.jp/ja/>）を行っています。

本学会も日本統計学会誌をJ-STAGEに登録・公開することとなり、論文本文をインターネットで閲覧・検索（Vol.32以降）ができるようになりました。

詳細は、ホームページ

<http://jjss.jstage.jst.go.jp/ja/>

をご覧ください。

（本学会ホームページにもリンクされています。）

10 評議員会議事録

以下の2件の評議員会の議事録の掲載が遅れてしましました。本号で掲載させて頂きます。

2000・2001年度第5回評議員会

日時：2002年9月7日（土）17：00－19：30

場所：明星大学大学会館特別食堂

出席者：杉山高一会長、小西貞則理事長、伊藤彰彦、岩崎学、鎌倉稔成、栗木哲、鈴木和幸、瀬尾隆、竹村彰通、土屋隆裕、富澤貞男、濱砂敬郎、広津千尋、松田芳郎、丸山久美子、水田正弘、矢島美寛、山口和範、美添泰人、渡辺美智子、藤澤洋徳、他委任状10名。

冒頭に杉山会長より定足数の確認が行われた。

＜報告事項＞

＜議題1＞理事会からの報告

小西理事長より以下のような報告がなされた。

統計学会欧文誌については、SciPress社に電子ジャーナル化および印刷を委託契約して、2001年第31巻1号から電子ジャーナル化したこと、欧文誌の海外購読を促進するため、SciPress社から外国機関にsample copyを送り購読を促したこと、同社のホームページで2001年度以降の論文の公開を行

っていること、科学技術振興事業団のホームページで、欧文誌の無料公開の方向で検討していること等が報告された。

会員相互の情報交換の場を提供する目的で、会員のメーリングリストkaiin@jss.gr.jpを新設したことが報告された。各種賞の新設について議論し、統計学会賞や小川研究奨励賞に加えて、例えば、統計教育賞、最優秀論文賞などの賞の新設を検討したことが報告された。

日本経済学会連合への評議員の推薦、大学評価委員会委員候補者の推薦、科学研究費審査委員候補者の推薦等を行ったことが報告された。

竹村涉外担当理事より、韓国統計学会との協力関係について報告がなされた。当初は、相互の大会に於いて一年交替で特別セッションを設けること、韓国統計学会との会誌交換・販売が実現し、韓国統計学会会員が本学会欧文誌を購入する場合は2,000円とし、本学会会員が韓国統計学会誌を購入する場合は2,500円、機関購読は13,000円とすることが報告された。また、台湾とは交渉中であることが報告された。

矢島和文誌担当理事より、和文誌の編集状況について報告がなされた。解説記事一つ、受理論文3つ、大会記録等が次回の和文誌に掲載予定であることが報告された。

<議題2>第70回大会の報告

広津大会運営担当理事より大会の準備状況や見通しについて説明がなされた。

<議題3>統計学会賞受賞者・小川研究奨励賞受賞者の報告

杉山会長より、本年度統計学会賞の受賞者3名（甘利俊一氏・尾形良彦氏・黒田昌裕氏）が報告された。小西理事長より、小川研究奨励賞の受賞者（黒木学氏）が報告された。

<議題4>各委員会よりの報告

杉山学会活動特別委員会主査より、研究分科会の新設に関わる事項を中心に報告がなされた後、研究分科会規定案について説明があり、審議の結果承認された。

矢島学会組織特別委員会主査より、委員会において、科研費補助金申請の活性化対策、和文誌と欧文誌の編集・出版の在り方、学会員のすそ野を広げる対策、本委員会の存廃について議論を行った旨報告があった。

<議題4>その他

松田評議員より、日本学術会議再編の動きについて報告があった。

<審議事項>

<議題1>2001年度事業報告案と決算案

土屋庶務会計担当理事より、資料に基づいて、2001年度事業報告案と決算案の説明の後、濱砂監事より会計監査報告がなされた。小修正の後、総会に諮ることが承認された。

<議題2>2002年度事業計画案と予算案

土屋庶務会計担当理事より、資料に基づいて、2002年度事業計画案と予算案の説明がなされた。統計関連学会連合大会として開催したことに伴う予算案の記載方法について意見交換が行われた。審議の結果、小修正の後承認され、総会に諮ることが決まった。

<議題3>第71回大会

小西理事長より、2003年度の大会は、日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会の3学会が

統計関連学会連合大会として開催し、日本行動計量学会が、開催時期と場所を同じくする同時開催とし、名古屋地区において2003年9月上旬をめどに開催する案が説明され、審議の結果承認された。なお、日本分類学会と日本計算機統計学会には、協賛を依頼することとした。

<議題4>総会の式次第

杉山会長より説明が行われ、承認された。

<議題5>名誉会員

推薦者による推薦理由の説明があり、3名（浅野長一郎氏・大屋祐雪氏・永山貞則氏）の推薦候補者を総会へ諮ることが承認された。なお、会員からの推薦以外にも、例えば、理事会等で名誉会員としてふさわしい方の推薦を行ってはどうか、という意見が出された。

<議題6>入会希望者

杉山会長より入会希望者の説明がなされ、承認された。

<議題7>横断型基幹科学技術研究団体連合

小西理事長より、標記の横断型学会連合の設立に向けての経緯が述べられた後、資料に基づいて、「横断型基幹科学技術研究団体連合規約案」について説明がなされ、積極的に参加を検討するという理事会案が承認された。

<議題8>その他

小西理事長より、土屋庶務会計担当理事に替わって、南美穂子会員が就任し、現選挙管理委員の南美穂子会員に替わって、金藤浩司会員が就任する案が示され、承認された。

2002・2003年度第1回評議員会

日時：2002年9月8日（日）18：30-19：30

場所：明星大学大学会館第3会議室

出席者：杉山高一会長、小西貞則理事長、氏家勝巳、大戸隆信、景山三平、勝浦正樹、鎌倉稔成、北川源四郎、国友直人、栗原考次、西郷浩、坂元慶行、柴田里程、清水邦夫、杉浦成昭、瀬尾隆、田中豊、田村義保、垂水共之、寺崎康博、道家眞幸、富澤貞男、西井龍映、浜砂敬郎、樋口知之、広津千尋、福井武弘、藤井光昭、藤澤洋徳、牧野

都治，南美穂子，宮岡悦良，森博美，柳川堯，美添泰人，若木宏文，渡辺則生，渡辺美智子，土屋隆裕，他委任状2名。

冒頭に杉山会長より定足数の確認が行われた。

<報告事項>

<議題1>前評議員会からの引継事項

小西理事長より、統計学会欧文誌の電子ジャーナル化、SciPress社のホームページ上での無料公開、海外購読の促進、会員相互の情報交換の場としてのメーリングリストの新設、韓国、台湾を中心とした国際交流の促進、各種賞の新設、研究分科会設立に伴う分科会規定の設定、第71回大会、横断型学会連合設立に向けての経緯と目的・趣旨、な

どについて報告がなされた（詳細は、2002年9月7日開催の2000・2001第5回評議員会議事録を参照下さい）。

<審議事項>

<議題1>理事長の選出

2002・2003年度理事長選挙を行い、国友直人評議員が新理事長に選出された。新理事は新理事長に一任されることが承認された。

<議題2>各種委員会の設置について

統計教育委員会以外の委員会は、次回の評議員会で設置について議論することを確認した。

（文責：藤澤庶務会計担当理事）

11 2002・2003年度理事会議事録

2002・2003年度 第4回理事会議事録

日時：2003年2月22日（土曜日）12：15～16：00

場所：統計数理研究所 特別会議室

出席者：藤越康祝会長、国友直人理事長、加納悟、柴田里程、岩崎学、和合肇、宿久洋、赤平昌文、竹村彰通、瀬尾隆、藤澤洋徳、南美穂子、藤原丈志（中野情報担当理事代理）

はじめに、会長に選出されて初めての理事会にあたり藤越新会長からあいさつがあった。

<議題1>理事長と各理事からの報告

[会誌：欧文] 久保川担当理事の代理で国友理事長より、現在、採択された論文が4本、審査中のものが16本あること、サイプレス社の担当者が替わったこと、母語話者（native speaker）による英文の校閲は從来どおり行われていることの報告があった。スタイルファイルをホームページに載せてほしいとの要望が広報担当理事に出された。

[会誌：和文] 加納担当理事より、採択された論文が2本、審査中のものが5本あるとの報告があった。投稿を積極的に促進してほしいとの要望が出された。

[大会企画] 岩崎担当理事より、連合大会の企画セッションの企画を募集中で3月10日締め切りであること、チュートリアルセミナーは9月2日の午後に2つのテーマを平行して行い、市民講演会はチュートリアルのあと夕方に開催する予定であること、4月の会報で連合大会のお知らせすること、講演の申込みのスタイルを変え連合大会として一本化しウェブやメールでの申込みを主体とすること、申込み締切りは昨年より遅く6月中旬頃とし申込み時のアブストラクトを昨年に比べてより詳しく書いてもらうようにすることの報告があった。その後、招待講演の講演者をどのように決めるのかに関して議論があった。

柴田企画担当理事より、企画セッションはオーガナイザーが企画し、原則としてすべて招待講演である。それ以外に特別企画セッションという形で、統計学会が招待するという形も可能で会長就任演説も特別企画セッションと考えているとの説明があった。

[大会運営] 和合担当理事より、実行委員会が1月29日に名城大学で行われ、施設を見学したこと、名古屋地区委員の担当を決めたこと、懇親会は連

合大会の3学会、行動計量学会、協賛2学会の計6学会の合同で行うこと、ソフトウェアと書籍の展示は行動計量学会と合同で行うが受け付けは別々にすること、受け付けアルバイトは名古屋地区で手配すること、参加費を決めたこと、ホームページは名古屋地区で作成すること、保育室の設置を決め部屋も確保できたことの報告があった。

[会報] 山口担当理事の代理で宿久理事より、No.114は1月に発刊したこと、次号は新会長の挨拶、追悼記事、研究分科会の紹介、連合大会のお知らせを掲載する予定であることの報告があった。3月29日に開催される連絡委員会で連合大会の企画などが確定するので締め切りを3月末日に延ばすことができるか山口担当理事に確認することにした。

[ホームページ] 宿久担当理事より、現在ホームページを改訂中で、3月初旬に切り替える予定であるとの報告があった。

[情報] 藤原幹事より、現在は会員メールの一元管理ができていないのでシングルオーナーから会員情報と更新情報を入手することを考えているとの報告があり、メーリングリストに理事会メンバーからも積極的に投稿をして欲しいとの要望が出された。JSSサーバーを使っている応用統計学会がメーリングリストを作ることを承認した。

[涉外] 竹村担当理事より、韓国統計学会誌の購入を推進して欲しいとの要望が出され、売り上げの清算方法はできるだけ簡便な方式にしたいと考えているとの報告があった。瀬尾担当理事より、資料をもとに、国立情報学研究所電子図書館サービスの運用にかかる申し合わせを行ったこと、J-STAGEの件に関しては検討中であること、ロゴマークの公募は締め切りが3月末であることの報告があった。柴田理事より電子サービスに関する著作権については詳細に調査した方がよいとの意見が出された。国友理事長より公開開始時期は発行日から2ヶ月を6ヶ月に変更して欲しいとの意見が出され承認された。

[理事長からの報告] 国友理事長より、藤越新会長との打ち合わせを1月9日に行ったこと、実行

委員会を1月29日に行なったこと、連絡委員会は3月29日に行なう予定で、今年の連合大会の企画案などを確定し、次年度以降の連合大会をどうするか検討する予定であるとの報告があった。また、次回以降の理事会の予定を決めた。

<議題2>学術会議会員選挙の候補者と推薦人

国友理事長より、学術会議会員選挙の手続きは学術会議の会員を決める推薦管理委員会・事務局からの連絡により一時中断されていたが、結局従来どおりの選出方法となったとの報告があり、会員による選挙の時間的余裕がないことから理事会で候補者と推薦人を決めることになった。

<議題3>会員逝去の際の取り扱いに関するメモ
藤越理事長より、資料をもとに、日本統計学会慶弔規定（案）の説明があった。附則は平成15年度に変更し、三。に「その他特に会長の判断により弔意を示すことができる。」などを付け加え、「申し合わせ」にすることとした。藤澤理事が担当することになった。

<議題4>最優秀論文賞等の新設について

最優秀論文賞の新設にあたって、今後どのような形で検討していくか議論され、ワーキンググループを作り検討することになった。

<議題5>大学評価委員会評価員候補者の推薦

国友理事長より上記事項につき説明があり、候補者を検討した。

<議題6>和文誌を年2回発行した場合の費用について

南庶務担当理事より、資料をもとに、和文誌を年2回発行した場合の費用について検討したこと、会報の一部と広告を和文誌に掲載することにし会報の発行回数を減らせば現在と同じ予算で和文誌を年2回発行することも可能であるとの見通しが報告された。関連して、和文誌に他の記事を載せることの影響、和文誌の電子ジャーナル化、

会報のウェブ化、他の学会誌との統合問題などに
関して多くの意見が出され、和文誌・会報のあり
方について今後も検討していくこととした。

<議題7>2004年度の連合大会への参加問題
2004年度の統計関連学会・連合大会への参加に
関しては、国友理事長、藤越会長より日本統計学会
の会員にとってもメリットがあるので、時期が7
～9月開催となるならば前向きに検討してはとの
意見が述べられた。

<議題8>2004年度の大会開催校
赤平涉外担当理事より2004年度大会の開催候補地
の2校について説明があった。3月29日の連合大
会連絡委員会で開催地を議論する予定である。

<議題9>退会の承認
4名の退会が承認された。

次回の理事会は4月19日（土）に開催する。

2002・2003年度 第5回理事会議事録
日時：2003年4月19日（土曜日）12：10～16：30
場所：統計数理研究所 特別会議室
出席者：藤越康祝会長、国友直人理事長、久保川
達也、加納悟、柴田里程、倉田博史、和合肇、山
口和範、宿久洋、中野純司、赤平昌文、竹村彰通、
瀬尾隆、藤澤洋徳、南美穂子

<議題1>会長、理事長、各理事からの報告
[会長] 藤越会長より、資料に基づき、会長引継
ぎ事項の報告があった。関連して、研究集会など
の情報のホームページへの掲載やリンクについて
意見が交換された。

[欧文誌] 久保川担当理事より、現在、採択され
た論文が9本、不採用が6本、審査中が18本あり、
次号はこの9本の論文を掲載予定である。また、
表紙のデザインや色の変更を検討中であるとの報
告があった。韓国学会誌と行っている学術交流に
関して意見を交換した。これに関しては、次回理

事会で再度検討することになった。

[和文誌] 加納担当理事より、現在採択された論
文が3本、不採用が1本、審査中が3本あるとの
報告があった。

[涉外] 竹村担当理事より11月に韓国統計学会の
大会があり今年は日本統計学会からオーガナイザ
ーを推薦することになっているが、藤越会長を推
薦したいとの提案が出され了承された。また、4
月7日に設立総会が開かれた横断型連合に関して
説明があった。

瀬尾担当理事より、電子図書館で公開するもの
に対する著作権はPDFファイルのダウンロードの
み認めるものとし、前回理事長から提案のあった
ように発刊6ヶ月後から公開することにした。著
作権委譲のサインをもらっていないものに関して
も今後サインをもらうことを考えたいとの報告が
あった。投稿規定に著作権に関する記述を入れる
こと、会報記事の取り扱いなどに関して意見を交
換した。

[広報] 山口担当理事より、No.115は記事の追加
や訂正が多かったので校正を一回増やすこと、
No.116は7月下旬にプログラムと一緒に発送する
予定であることの報告があった。宿久担当理事よ
り、日本語のホームページを変更し、あわせて英
語も変えたとの報告があった。

[大会] 和合担当理事より、4月26日に実行委員
会が名古屋大学で開催される予定であるとの報
告があった。その後、懇親会やソフトウェア紹介の
あり方について意見を交換した。

[企画] 柴田担当理事より、資料をもとに3月29
日に行われた連合大会企画委員会で議論されたこ
とに関して説明があった。

[庶務] 藤澤庶務担当理事より、11月の評議員会
で指摘を受けた学生会員から正会員への移行手続
きを行っていない会員が多いことへの対策とし
て、移行手続きをしてもらうようメールで呼びか
ける予定であるとの報告があった。

[理事長] 国友理事長より、学術会議会員選挙に
関して経済統計学は松田芳郎会員、統計学は柳川
堯会員、情報学は北川源四郎会員を推薦したこと、

大学評価機構への統計関連の推薦依頼に対して人文系は柳井晴夫会員、経済系は山本拓会員を推薦し、農学系は推薦を見送ったことの報告があった。また、今年度は統計関連学会連絡委員会の下部組織として連合大会実行委員会、企画委員会、事務局があること、来年の大会については6月の連絡委員会で決まる予定であること、論文賞に関しては柴田理事、瀬尾理事、理事長で原案を作り理事会に提出すること、学会誌に対する補助金が今年度は増えたこと、日本統計学会の入会のお誘いを改訂するつもりであることの報告があった。

＜議題2＞和文誌の年2回発行について

国友理事長より、和文誌を年2回発行する方向で検討を進めたいとの意向が示され、それに伴う経費の増加を抑える方法に関して議論した。

＜議題3＞会費長期滞納者の扱いについて

藤澤庶務担当理事より、資料をもとに、会費の長期滞納者の扱いと現在の問題点について説明があり、会則第16条の2)を削り、変更する方向で検討することになった。

＜議題4＞メーリングリストについて

中野情報担当理事より、メーリングリストは3ヶ月に一度シンフォニカからメールアドレスのリストをもらい更新することにするとの報告があった。名簿作成の際にメールアドレスを書いてもらうよう何らかの工夫をする必要があるとの意見が出された。

＜議題5＞評議員会の開催時期について

国友理事長より、9月の連合大会で評議員会を開催したあと、従来の11月初旬の開催では間隔が短すぎるのでないかという意見が述べられた。開催時期に関しては9月の評議員会で会長が提案する予定である。

＜議題6＞ロゴマークについて

瀬尾担当理事より、ロゴマークの公募は3月末に締め切り、20件の応募があったとの報告があった。審査は理事が点数をつけ、それを参考に、会長、理事長、瀬尾理事が検討することになった。

＜議題7＞退会者の承認

会員18名と賛助会員2団体の退会が承認された。

＜議題8＞会員増の方策について

国友理事長より、賛助会員・団体会員の退会者がこのところ多いとの説明があり、各理事に賛助会員を増やすよう働きかけて欲しいとの要望が出された。賛助会員への謝意を何らかの形で表すこと、賛助会員であることのメリットを増やす方法などに関して議論した。

＜議題9＞「入会のお誘い」と入会申込みについて

「入会のお誘い」を改訂することにし、瀬尾理事が担当することになった。また、入会申し込みに推薦者の記入をなくす方向で検討することになった。

＜議題10＞その他

次回の理事会は6月21日(土)に開催する。

12 公募情報

12.1 岐阜大学工学部応用情報学科教官公募

公募人員 助教授 1名

システムなど)

専門分野 情報工学・情報科学分野

応募締切 2003年 8月31日

(情報システム、知能システム、計算機支援シ

着任時期 2003年 12月1日以降のできるだけ早

い時期

問合せ先 岐阜大学工学部応用情報学科長
速水 悟

電話 (058) 293-2763

e-mail: hayamizu@info.gifu-u.ac.jp

13 会合案内

*科学研究費研究集会案内

(S1) 「量子推測理論の数理統計学的基礎とその応用」「基盤研究A（1）」（研究代表者：赤平昌文，課題番号14204006）によるシンポジウム計画一覧表（平成15年度分）

1. Non-locality of Quantum Mechanics and Statistical Inference（略称NQSI）

（量子力学の非局所性と統計的推測）

研究分担者：櫻井明夫（京産大・理），松本啓史（国立情報学研），林 正人（科学技術振興事業団）

日時：平成15年9月8日（月）～9月9日（火）

場所：京都産業大学12号館（京都市北区上賀茂）

主催：京都産業大学、科研費研究班

協賛：日本物理学会、日本科学技術振興事業団

内容・目的：本シンポジウムは、直前に開かれる量子情報科学の国際会議EQIS'03のサテライトワークショップでもあり、量子力学の非局所性と統計性をテーマに理論・実験の研究発表を行う。とりあげる演題は量子推定、量子検定など量子力学の統計理論的基礎にかかわるものほか、量子エンタングルメント、非局所的相関、量子緩和、観測問題など、具体的な物理現象と理論に関するものである。発表は招待講演（国内5名、海外6名）・公募講演およびポスターからなり、英語で行われる。研究発表と活発な議論を通じて分野間の相互理解を深め、量子力学の基礎に横たわる未解決問題の解明と、量子情報科学の発展を目指す。

旅費の配分：講演者を中心に配分する。

参加登録費：一般 3000円、学生 2000円 を参加当日に申し受けます。

懇親会：9月8日夜刻 京産大学内にて行いま

す。

参加登録・宿舎・予稿など：NQSIホームページ
www.kyoto-su.ac.jp/nqsi/をご覧ください。

2. 数理統計学と計量心理学をつなぐ

研究分担者：狩野 裕（大阪大・人），千野直仁（愛知学院大・文）

日時：平成15年11月3日（月）～11月5日（水）

場所：大阪大学人間科学部東館207教室（ユメンヌホール）

内容・目的：方法論と実質科学は車の両輪であり互いに情報交換することでそれぞれの学問を発展させることができる。本シンポジウムは、実質科学として心理学や行動学などの社会科学を念頭におき、それらの分野におけるデータ科学的方法論を、数理統計学と計量心理学的立場から議論したい。議論したいトピックは幅広く、(i) 反復測定データの分析、線形・非線形混合モデル、(ii) 因果推論、欠測データの分析、グラフィカルモデリング、構造方程式モデリング、(iii) 独立成分分析、多次元尺度法、因子分析などの多変量解析、などを考えている。また、問題提起、サーベイ、応用研究、数理統計学者から計量心理学者への提言、計量心理学者から数理統計学者への提言なども歓迎する。

旅費の配分：講演者を中心に配分する。

宿舎の斡旋：斡旋しない

講演申し込み期限：10月10日（金）

申込先：〒565-0781 吹田市山田丘1-2

大阪大学大学院人間科学研究科

狩野 裕

TEL (06) 6879-8052

FAX (06) 6879-8052

E-mail: kano@hus.osaka-u.ac.jp

予稿集：予稿集を作成します。講演者の方は、予稿（A4サイズ）を予稿送付期限までにお送りください。なお集会報告書を作成しますので、講演者の方に別途、原稿の作成（A4サイズで2枚）を依頼します。

予稿集送付期限：10月17日（金）

予稿送付先：上記申込先と同じ

3. 統計的推測の理論とその応用

研究分担者：高田佳和（熊本大・工），岩佐学
(熊本大・工)

日時：平成15年11月17日（月）～11月19日（水）

場所：熊本大学大学院自然科学研究棟2階ゼミナ
ール室

内容・目的：統計的推測に関する様々な理論や方
法論、それらの新しい展開、その応用例につい
ての発表と討論を行う。研究成果の発表だけ
なく、これらに関わる最新の話題や研究の紹介、
新たな問題の提起等の講演も歓迎します。

旅費の配分：講演者を中心に配分する。

宿舎の斡旋：斡旋しない

講演申し込み期限：10月17日（金）

申込先：高田佳和

〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1

熊本大学工学部数理情報システム工学科

TEL (096) 342-3625

FAX (096) 342-3609

E-mail: takada@cs.kumamoto-u.ac.jp

予稿集：予稿集を作成します。講演者の方は、予
稿（A4サイズ）を予稿送付期限までにお送り
ください。なお集会報告書を作成しますので、
講演者の方に別途、原稿の作成（A4サイズで
2枚）を依頼します。

予稿集送付期限：10月31日（金）

予稿送付先：上記申込先と同じ

4. データ解析のための統計科学理論

研究分担者：白石高章（横浜市大・理）、瀬尾
隆（東京理科大・理）、加藤 剛（慶應大・理
工）

日時：2003年12月10日（水）～12月12日（金）

場所：横浜市立大学よこはまアーバンカレッジ

TEL 045-841-5900

〒233-0002 横浜市港南区上大岡西1-6-1

ゆめおおおかオフィスタワー17階

（京浜急行上大岡駅より徒歩約5分、市営地下
鉄上大岡駅より徒歩約3分）会場までの順路は
<http://crystal.sci.yokohama-cu.ac.jp/meet15.html>をご
覧ください。

内容・目的：より小さなコンピュータとOSの發
展により、多くの分野で統計データの解析が行
われている。本シンポジウムでは、パラメトリ
ック、ノンパラメトリック、セミパラメトリック
を問わず、データ解析に有用な統計手法と理
論について研究発表及び討論を行い、今後の研
究の方向性について展望する。まだデータ解析
に利用できるか不明であるが可能性のある統計
手法の理論も歓迎する。また、研究成果に限ら
ず、最新の話題の理論紹介も歓迎する。

旅費の配分：講演者を中心に配分する。

宿舎の斡旋：斡旋しない。

申込期限：11月10日（月）

申込先：白石高章

〒236-0027 横浜市金沢区瀬戸22-2

横浜市立大学大学院総合理学研究科

数理科学部門

e-mail: crystal@yokohama-cu.ac.jp

Tel: 045-787-2195

予稿集：講演者の方は、A4サイズの予稿の原稿
(ページ数は15ページ以内)を予稿送付期限ま
でにお送り下さい。なお、集会報告書を作成し
ますので、講演者の方に別途、報告書用原稿の
作成（A4サイズで2枚程度）を依頼します。

予稿送付期限：12月5日（金）

予稿送付先：上記連絡先と同一

懇親会：12月11日（木）夕方、参加希望の方で10
日にシンポジウム会場に来られない場合は12月
5日までに『懇親会参加』と白石に連絡のこと。

(S2) 「統計的領域推定における精確な推定方式の開発と実用化の試み」「基盤研究（B）」
(研究代表者：赤平昌文、課題番号12554002)によるシンポジウム計画一覧表（平成15年度分）

1. 実験計画法とその周辺における組合せ的構造の解明とその応用

研究分担者：白倉暉弘（神戸大・発達科学）、棄田正秀（広島大・総合科学）
日時：2003年12月4日（木）～6日（土）
場所：白浜かんぽの宿

〒649-2211 和歌山県白浜町1688-2

TEL 0739-42-2980 FAX 0739-42-2978

URL:

<http://www.kampo.kfj.go.jp/shisetsu/yado2/1292shirahama/index.html>

内容・目的：統計的計画の考察から発展してきた実験計画法は、今日では離散数学あるいは組合せ理論の一部としても確立し、実験計画以外の分野への応用も盛んになってきた。本シンポジウムでは、実験計画法とその周辺に関する最新の話題やその推測理論に関する研究発表及び情報交換を行う。実験計画・デザイン理論の最適性、構成、推定方式に関する話題、またはその他への応用も歓迎する。

旅費の配分：講演者を中心に配分する。

宿舎の斡旋：斡旋しない。ただし、同宿に宿泊を希望する参加者は9月3日（水）までに白倉（sirakura@kobe-u.ac.jp）に連絡して下さい。

申込期限：10月27日（月）

申込先：棄田正秀

〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1

広島大学総合科学部

E-mail: kuwada@mis.hiroshima-u.ac.jp

TEL: 0824-24-6468 Fax: 0824-24-0756

問い合わせ先：上記申込先と同一

予稿原稿：各自予稿（ページ数は問わない）を当日30部持参すること。集会報告書は後日作成するので、発表者には別途原稿作成（A4サイズで2頁程度）を依頼する。

*会合案内

2003年8月

* 8.3—7 : The Joint Statistical Meetings 2003

San Francisco, California, USA

<http://www.amstat.org/meetings/jsm/2003/>

* 8.13—20 : The 54th ISI (International Statistical Institute) Session

Berlin, Germany

<http://www.isi-2003.de/>

サテライトミーティングも多数計画されています。詳しくは上記ホームページをご覧ください。

2003年9月

* 9.2—5 : 2003年度統計関連学会連合大会

名城大学天白キャンパス

* 9.3—5 : 日本行動計量学会第31回大会

名城大学天白キャンパス

<http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/bsj2003/>

14 修士論文・博士論文の紹介

修士論文・博士論文の紹介を、(1) 氏名、(2) 学位名、(3) 取得大学名、(4) 論文タイトル、(5) 主査名、の順で記載します。

修士論文

(1) 一場知之 (2) 経済学修士 (3) 東京大学経済学研究科 (4) Asymptotic Properties of Maximum Likelihood Estimator in Some State Space Models (5) 国友直人

(1) 松下幸敏 (2) 経済学修士 (3) 東京大学経済学研究科 (4) A Comparison between the Empirical Likelihood and GMM Methods (5) 国友直人

(1) 松井宗也 (2) 経済学修士 (3) 東京大学経済学研究科 (4) 経験特性関数を用いたコーシー分布のGoodness-Fit Test (5) 竹村彰通

(1) 戸石睦美 (2) 経済学修士 (3) 東京大学

経済学研究科（4）死亡率指標の経験ペイズ推定量とその平均二乗誤差（5）久保川達也

（1）池田真介（2）経済学修士（3）東京大学
経済学研究科（4）A Role of Estimation Error in Home Bias Puzzle under Incomplete Observation（5）
松原望

（1）小西葉子（2）博士（経済学）（3）名古屋大学（4）生産関数の特定化に関する統計的推測－集計データとミクロデータによる検証－（5）
根本二郎

（1）柿爪智行（2）修士（理学）（3）筑波大

学大学院数理物質科学研究科数学専攻（4）2項確率の正確な水準をもつ信頼区間の構成（5）赤平昌文

（1）舞原寛祐（2）修士（理学）（3）筑波大学
大学学院数理物質科学研究科数学専攻（4）荷重損失に関するリスクによる検定方式の比較（5）
赤平昌文

（1）小貫律子（2）修士（理学）（3）筑波大学
大学学院理工学研究科数学専攻（4）Estimation
for intervened distributions and others（5）赤平昌文

15 事務局から

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル内

財団法人統計情報研究開発センター

日本統計学会係

TEL: 03-5467-0481, FAX: 03-5467-0482,

E-mail: jstatsoc@sinfonica.or.jp

なお、次号から会報担当は、広報担当の宿久洋理事に引き継がれます。会報記事の投稿は、下記宛てお願ひいたします。

原稿送付先

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-35

鹿児島大学理学部 宿久洋宛

e-mail: kaih@jss.gr.jp

（統計学会広報連絡用e-mailアドレス）

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。新刊やソフトウェアの紹介、会合の案内なども歓迎いたします。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内（教員公募）なども受け付けております。また、修士論文・博士論文の紹介を行います。（1）氏名、（2）学位名、（3）取得大学名、（4）論文タイトル、（5）主査名（指導教員）、（6）連絡先（e-mailアドレス）をお送り下さい。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

誌報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

新家健精会員（2003年2月22日）

退会者

日本医師会（賛助会員）、日本ビジュアルニューメリックス（賛助会員）、山崎良也、加藤義行、岩沢嘉則、向井喬、泉俊衛、上田修功、有吉範敏、仙波浩平、三谷一二三、加藤孝之、宮沢美紀、小竹清文、高草武臣、小田英世、千葉敦史、山口栄一、湯浅透道、大久保正一、堀内行蔵

現在の会員数（2003年7月1日現在）

名誉会員 24名

正会員 1346名
学生会員 186名
総計 1580名
賛助会員 20法人
団体会員 4団体

・統計学会ホームページURL：

<http://www.jss.gr.jp>

・住所変更連絡用e-mailアドレス：

jusho@jss.gr.jp

・広報連絡用e-mailアドレス：

kaiho@jss.gr.jp

・その他連絡用e-mailアドレス：

jimu@jss.gr.jp